

龍膽寺雄全集

第四卷

龍膽寺雄全集

第四卷

龍膽寺雄全集 第四卷

昭和五十九年九月二十日 印刷
昭和五十九年九月二十五日 発行

著者 龍膽寺雄^{りゅうたんじゆう}

神奈川県大和市中央林間二一四一五

発行者 龍膽寺雄全集刊行会

発売所 株式会社 昭和書院

東京都新宿区神楽坂二一一九

銀鈴会館二〇七号 千二六二

電話〇三二六〇九三五四

振替 東京七一八二二七一

印刷・製本 図書印刷株式会社

定価 二、八〇〇円

©1984 Y. RYUTANJI

ISBN4-915122-49-2

目次

創作小説（昭和初期編）

十九の夏……………7

タンバリンを抛つ……………107

月を造る話……………133

C・子の主張……………143

創作小説（戦前・戦中・戦後編）

下付博多人形師『壺月』……………161

創作小説（最近編）

黒檀の馬……………191

エッセイ

科学とロマンティズム……………253

文学の衰退について……………258

随筆

便所秘話……………263

詩編……………270

初出……………277

解説……………278

創作小説

昭和初期編

十九の夏

第一編

一

十九の夏

「さようでございますね。若しかお吐き気がございませ
んようでしたら。……」
そういうきゝ慣れない女の声をつい耳元で聞いた時、

梯三は薄らに眼を開けて、思いがけないものでも見出し
たという風に、頭の高い漆喰塗りの天井をまじまじ
と眺めた。と、——不意にそれは、かぶさるように片側
から寄って来た母の顔で、暗く遮られてしまった。

「おや。……眼をさましたね梯三。」

と彼女は息を切って、それから眼尻へ皺を寄せて、ほ
つとしたという風に微笑んだ。そうして、腋のところへ
吊った氷嚢のわずかにずれたのを、慣れない手で直しな
がら、

「どう気分は。……痛くはない？」

と、気がかりげに、柔らかくきいた。

「え。」

そう答えるつもりだったが、声が出なかった。彼は毛布の外へ出した手を軽く動かして、

「僕。いつこゝへ運ばれたのかわからなかった。……」

と微笑んで母の顔を見て、枕の上で頭を動かして、

「……何だか、軽うい、こう階段か何ぞを上がるような気はしたけれど。……母さまこゝは二階なんでしょう？」

——窓から見ればすぐにわかったのだが、寝台の位置の都合でそれは無理だった。からだを動かさないで彼の見られる範囲は、簡素な花電気のさがった白い漆喰塗りの天井と、扉のかわりに新しい白いレエスを垂らした戸口と、広からぬ部屋にきちんと配置された色々な調度類、——白いカヴァを着た長椅子だの、腕椅子だの、それから、硝子の棚のついた白い薬卓子だのというようなものだけだった。寝台の四隅には塗りの少し剥けた細い白い鉄の柱が立って、頭の上でわくを支えて、白い小さな寒冷紗の蚊帳を、かたかたへたくためて載せていた。

それから暫く彼等の間には、ぼつぼつ短かい言葉で手

術の模様や何かについて、話が交された。——麻醉をする時はどんなだったとか、手術の間はちっとも覚えがなかったとか、その他似たようなことを色々と彼女はたずねた。そうして、彼はそれに対して覚えのあることだけをこまかに言葉少なに答え答えた。

「すぐこのお隣りに大きな学校があるのよ。」

ちよいと話が途切れたあとで、彼女は窓から外を覗いてみて、子供にでもいゝきかせるように優しく彼を顧み

た。

「大きな三階建ての学校よ。沢山娘さんたちが窓に凭っているの。……女学校なのでしょう。」

「W・ッて裁縫の女学校でしょう。たぶん。」

と、一寸考えたあとで彼は応じた。

スリッパの音が戸口から這入って来て、彼の視野の真ん中に見慣れないうぶうぶしい赭ら顔の看護婦が、立ちふさがった。彼女は持って来た薬瓶を二つ三つと散薬の袋などを、無雑作に硝子の薬卓子へ載せると、

「お眼ざめでございますね。……喉がおかわきになりますん？」

と、商売げのない娘々しい態度できいた。彼が答える

前に母は彼女を紹介して、付添いとして彼女が看とりをしてくれることになったのだからというような意味のことを述べて、

「なにぶんよろしく。もう、ねんね、えでございますから。……」

と、微笑んで首をさげた。

「喉がかわいちゃった！……」

そう彼が母に訴えると、

「たゞ今水を持って来て差上げましょう。一寸お待ち下さいまし。」

そういって、T・さんと呼ぶ若いその看護婦は、スリッパの音を立てて出て行った。

——彼女が口の長い硝子の「吸呑み」に氷のかけらを浮かして、カラカラと小さな音を立てながら彼のそばへ寄った時、急に沢山の鷺首が戸口へ近付いて、伯父夫妻や叔母夫婦や親族の見舞客などが七八人、賑やかに病室へ這入って来た。

「さめたな。」

と、伯父は氷のかけらを一つ口に含ませて貰って、更に吸呑みから水を呑んでいる梯三を見て、優しく声をか

けた。——彼等は今まで下の応接室で院長のS・博士から、手術の模様や経過や心得などについて話をきいたのだといって、それを一つ一つ梯三や母たちに改めて披露してきかせた。彼等は、——見舞いの人たちを除いて、——みな今日手術に立会うためにわざわざ病院へやって来たのだ。

「慣れたもんじゃ、しかし。……」

と、伯父は最後に母を相手に附加えた。

「スイスイとメスで撫でたかと思うと、ちよいと中へ指を突ッ込んでな。そう、このくらいもあつたかの。鳩の卵みたようなものをひと塊り抓み出しての……や、ゴボリ！　といい居つたて、……そいつをチョコキチョコキ鋏み切つての。それからちよいちよいと指の血などをこゝらへなすりつけたりして。……」

という風に、彼は手術著で指を拭く手つきなどまでしてみせた。

彼等が帰ってしまうと、女中のいとよしとが、トランクへ母の着換やこまごましい身の廻りのものなどを入れて、持って、麻布からやって来た。病室に附属した小部屋に当分彼女は寝とまりをして、自分で彼の看とりを

しようというのだ。看護婦の手も揃っているし、経過に別にそう注意のいる病人でもないのだから、そんな心配はいらないのだがと、再々病院側では彼女をとめてみたのだが、到頭彼女は自分の主張を通してしまったのだった。そうして、二度麻布の邸と病院との間に自動車を往復させて、彼女の滞在に不自由のないだけの準備を兼ねて、ぬかりなくとのえた。尤も、そのほかにもいとよしとが代わる代わるやって来て、看護婦の手伝いや母の身の廻りの世話などをする手筈にきめられたのだった。

「漸くこれで母さまもひと安心。」

と、彼女はいとを帰してよしを風呂へやったあとで、病室の寝台の枕元の腕椅子へ浴衣一枚にくつろいでから、いった。——天井の花電気にはもう灯りがついてゐた。二等室や三等室の一廊へ続いている表の広い廻廊には、絶間なく看護婦や患者たちのスリッパの音が錯綜して、ひっそりした中に何かしら落付きのない気配を漂わせていた。——丁度天井の電燈が外の明るみと光を競おうとしてゐるたそがれどきだったので、それは彼等の心に一種甘いわびしささえつのらせるのだった。

「母さま御飯は？」

「もう戴いたの。」

と、彼女は扇風器があるのに団扇を使いながらいった。

「……下に立派な食堂があつてね。尤も、母さまはお部屋へとって戴いたのですけれど。……あんたもお部屋がすいたでしょう？」

「そんなでもない。……」

と、彼は枕元の時計をいじりながら答えた。——今朝から絶食を命じられて、あけがたにはひまし油をかけられた。仰むいて寝てゐると胃部がベコンと凹んでいたが、それでもとりたてて空腹というような意識もなかった。時々おくびのような軽い吐気が来たが、自然とそれはやんだ。

「あしたまでの辛抱ね。」

そう彼女は頑はない子供にでもいゝきかせるような口振りでいって、彼の方へも風が行くようにバサバサと忙がしくまた団扇を使った。

よし、が風呂から戻って浴衣に着換えて来ると、彼女は表で少し涼んで来るから暫く代わっていてくれるようにと頼んで、立って帯や何かを直して、部屋を出て行つ

た。——看護婦は食事に行ったまゝまだ戻って来なかった。

母の留守に彼はよし、に暫く脚をさすらせた。——昨夜は下の特別附属室へ仮りに寝台を設けられて、そこへ一人で転がってみたのだが、到頭退屈が持ちきれなくなつて、手術をするとか分出られないからという口実で、銀座の夜店などをぶらついて来た。おまけに帰りに千足屋の果物などをしこたまさげて、ずっと通りを歩いて戻つて来たなどしたので、それがついさっきまでは何ともなかったのに、急に何とも名状しがたい不快な、だるい一種の重みをもつて、両脚に甦^{よみが}えて来たのだ。

母がバサバサと胸のあたりに扇を鳴らしながら、レエスをくどつて戻つて来た時にも、よしはまだ根氣よく彼の脚を撫でていた。

「よし。お前の手は熱くつて、汗ばつたくつて。……」
と苦情をいうと、彼女は、

「ではこう致しましょう。」

と、思いついたようにエナメル洗面器へ水を酌んで来て、それに手を浸けては指先を冷やしてそこらをさすつた。

「どうしたの、だるいの？」

「えゝ。だるいのでございますって。」

「そゝら御覧なさい。昨夜のたゞりなのでしょうね。」
なかば冗談らしく母はいつて、そうして寝台へ寄つて来た。

「御苦労。……では母さまが一つ代わつてさすつて上げましょう。よし、お前行つて少し汗でも拭いて、涼んでおいで。露台の辺の涼しいこと。」

そういつて無理に彼女を立たせて、母は乾いた冷たい柔らかな手で、梯三のすんなりした脚を丁寧にすみまでさすつた。

「もう沢山です母さま。」

と、梯三は脚を引いて膝を立てていつた。

「あそこに母さま扇風器があるんですよ。スイッチを入れたら？」

「なるほど、扇風器があつたのね。……かけてもいいゝ？」

「えゝ、かけて下さい。」

スイッチを入れるとぼつと頭の上の電燈が暗くなつて、やがて黒い渦巻の中で金の羽根がクルクル廻りはじめた。

昼間には見えなかった青山の叔父夫婦が訪ねて来て、一時間ほど話して帰って、それから蚊帳の裾をおろしておやすみの挨拶をし合ったのは、かれこれ十時過ぎだった。――寝床へ蚊帳をおろす前に当直の医員が経過を調べにやって来て、ざっと模様を看護婦からきくとって、ひと通り診察をして行った。帰る時に第三の口へ耳を寄せて、

「あゝそうですか。お腹がすきましたか。」

と、大きな声でいったので、みんなで一緒に噴飯した。

「これをこゝへ置いときますからね。御用があったらお鳴らし。看護婦さんでも母さまでもよしでも、誰でも起きて来ますからね。わかつて？」

そういつて、金鍍金をした小さな呼鈴を枕元の塵紙の上へ母は置いて行った。

看護婦は寝台の蔭へなかば入れて床へ寝床をのべた。リノリュームの上へ薄べりを一枚拵けて、そこへ新らし

い厚い布団を敷いた。寝台の片側はわずかな隙を置いて壁になっていたが、片側は彼女の寝床の真上で縁をたゝれているので、顔をちょいとそらすと彼女の寝床を真下に覗けた。

「寝ぞうをよくしないとお前、落ちたらT・さんを潰してしまいますよ。」

と、母はなかば冗談らしく、なかば本当に心配げにいった。寝台へ寝たことのない彼は自分でもその自信はなかったのだ。

「困ったなア。……落ちたら御免なさい。」

と、彼女にいった。帯を解いて手拭地の寝間着に着換えていたT・さんは、赧ら顔へ心持血をのぼせて、

「あら、厭やな坊っちゃん。……」

と、同い年ほどの第三を子供扱いにした。

電燈に黒モスリンの覆いをかけてそこらを薄暗くして、おやすみなさいと挨拶をして自分の寝床へ横になったT・さんは、ちょいとの間そこらをゴソゴソさせただけで、すぐに静かな寝息を洩らしかけた。

第三は正しく枕を頭の下へあてて、細く眼を開けたまま、彼女の寝息を軽く片側の耳にもつらせながら、睡れ

そうにもない頭で、今朝からの出来事を一つ一つこまかに振返ってみた。——それらの記憶の中で何よりも執拗に彼の頭に残っているのは、手術台の上へ寝かされていよいよ手術がはじまるという前後の、あの不思議な気持ちだった。

「手術をしているところなんぞを見ると、母さまは眼を廻わしてしまふから、」

そういつて、それから、

「安心して大丈夫よ。院長さんがじかにして下さるのだから。それに、……伯父さまも、叔母さまも、そのほかみなさまがついて下さるのだからね。」

そんな風に彼女は手術室の、扉の前で彼にいきかせた。が、どちらかというところ、そんなことをいつている彼女自身が、誰よりも不安に怯えた落付かない眼をしていた。

大きななま、明るい手術室の、濡れたコンクリートの床へひと足入れた最初に、彼の眼を惹いたのは、タイル張りの壁の真ん中へ大きく塗り籠めた蒸気罐の口だった。蛇輪だの槓杆だの蛇管だのメーターだのというような、色々こまこましい金属の装置が、冷たくキラキラとそこ

に光っていた。

手術台は、からりとした床にひっそりと三つ並らんでいた。

「これへお載りになって、……」

院長の特別診察室へ伯父に連れられて最初に顔を出した時から、しじゅう一緒にいたような気のする、瞳の黒く冴えた蒼白い顔の看護婦が、彼をなつかば抱上げるようにして、その上へ仰に載せた。そうして、器用な手でスルスルと着物を、お腹のあたりまで剥いでしまった。

——変にべとつくような黒レザアの覆いが、肩やら腕やらに不快に触れた。

「落付いて、静かに、……」

騒ぎ立った胸の鼓動を抑えるような穏やかな誰かの声が、風のように耳へささやかれた。一度眼をつぶって開らくと、大きな硝子を四枚嵌めた天井の明り窓が、まとも眼に這入った。——部屋の隅々にまで滲っている無気味な陰影のない明るみは、そこから落ちる光と、ぐるりの白い壁からの反射らしかった。

よくはわからなかったが、十人からの医員や看護婦たちが、手術台のぐるりをとりまいてるように思われ

た。手術に立会うといった伯父や叔母たちはどこにいるのか。——彼の気持では、彼の載せられた手術台だけが、それらの医員たちや何かにとりまかれて、どこか恐ろしい広い淋しいところにぼつり置かれていてという風に感じられた。

時折りチリンとかカチリとか、磁器や金属の触れ合う音が耳元でした。——ぐるりの人々はひと言も口をきかなかった。たゞ、両側からとられた手首が、注意深く拇指の根元を圧迫されて、脈搏か何ぞを調べられているのが、意識されただけだった。

——チヨリチヨリと腋の下へ軽く剃刀かみそりがあてられた。そうして、続いてサッ！と刺戟的な鋭い感じがその周囲へ拡がって、アルコールの匂いが鼻をついた。

「よし。」

誰かが低い低い声で耳元でいった。と、口と鼻とをボヤボヤした袋か何ぞのようなもので覆われて、続いて、サッと鋭い芳香をもった液体が滴下された。

「ずうッと深く吸って。……」

耳元でさっきの聲が優しくさゝやいた。と、——突然、鋭い刺戟で胸を刺されて、はげしく彼はむせ返って、コ

クリコクリとやめずから、唾を喉へ送った。

——ズン、ズン、ズン、ズンと、段々に、そうして無際限に早まって行く恐ろしい騒音が、彼のぐるりにあった。そうして、こまかい、蒼い、無数の星が、暗黒の奥へ燦然と鑲ちぎめられて、それがその騒音につれて、クルクルと渦形に、急速に廻った。

それが、——短い間に激しく小刻みになって、ドドドドドッ！というそら恐ろしい連続へと移って、（あゝ死ぬな！）と臍ろに意識した瞬間、蒼ざめた平穏な水面が、ホッカリと彼の前へ現れて、——そうして彼は意識を失った。

その蒼ざめた、何とも名状しがたい穏やかな、平和な水面の、鈍い光はつきりと彼の頭に残っていた、彼は細めた眼で、覆いをかけた天井の灯りを蚊帳越しに仰ぎながら、じつと眼によらないもう一つの視覚で、その印象を再現させてみた。——寝台の下の方看護婦の寢床はひっそりしていた。枕元へ置く懐中時計のセコンドの音だけが、虫が匍うように敷布の面を匍って、彼の耳へ伝わって来た。

——彼が微かな意識をとり戻して最初に感じたのは、